

「内視鏡下治療手技の実際」

Praxis der therapeutischen Endoskopie (1997 Georg Thieme Verlag)

Nib Soehendra, Kenneth F. Binmoeller,
Hans Seifert & Hans Wilhelm Schreiber

著

慶應義塾大学医学部教授 北島 政樹

監訳

北里大学東病院院長

比 企 能 樹

内視鏡下手術の世界での Soehendra, Binmoeller, Seifert というトップの内視鏡外科医たちが、そしてドイツ外科学会の巨匠 Schreiber の統率の下に、その豊かな経験から書き上げた本書が、日本においてこの度出版されたことは、誠に同慶の至りである。

特に、日ごろから内視鏡下治療を積極的に推進され、本邦のこの部門での牽引車である慶應義塾大学外科・北島政樹教授と、そのご一門が翻訳に携わられたということが、この本の内容にいっそう重みを増し、更に説得力を増したことは間違いない。

まず本を開くと、次々に要所を正確に捉えたきれいなイラストに目を奪われる。あらゆるむだを省いた画が表す種々の手技は、いまだに内視鏡下手術を見たことのない人でさ

え、その手技の想像がつくほどに鮮明で、丁寧なものである。何事も一見するに如かずであるように、この本を開くすべての人が納得するようすばらしいイラストであると思った。

そもそも内視鏡が発明されて以来、長くその役割は診断のためであったが、その後内視鏡を使つての治療ということが始められた。消化器疾患に対しては、当初止血を目的として行われたが、現在では内視鏡治療は多岐にわたり、その技術の発展は止まるところを知らない。すなわち、消化管内の出血治療をはじめ、腫瘍を除去すること、あるいは腹腔鏡による胆道結石の碎石術等々一昔前には考えられなかったような手技が発明され、実際に応用されているのである。

この本は、それらの技法を、各々

の項目ごとに、概論、適応、必要事項、器具、手技、合併症という順序で、実に要領よく解説されており、そのうえに鮮やかに描かれたイラストにより、その説明がますますわかりやすくなっている。ドイツ人らしい正確さを持ったリアリティの表現が特徴的な著書である。

したがって、これから内視鏡を始めようとしている人たちにとってはもとより、既に内視鏡下手術を行っている人々にとっても、この本を常に卓上に置き、何度も頁を繰ることによって、より正確な治療を行うためのバイブルになるのではないかと確信する。

● A 4 頁 228 図 551 1997 定価
(本体 28,000 円 + 税) 円 400

(株)メディカル・サイエンス・インターナショナル販売部 (☎ 03-5804-6051)